

JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY THE RAICHO HIRATSUKA PRIZE

2009（平成21）年12月10日

報道関係各位

日本女子大学

第五回「平塚らいてう賞」 受賞者決定

～ 顕彰（1件）「松村由利子氏」 奨励（1件）「芝原妙子氏」～

世界人権デーにあたる12月10日（木）、日本女子大学は研究者・学生の顕彰・奨励を目的とした第五回「平塚らいてう賞」の受賞者を発表しましたので、お知らせいたします。

「平塚らいてう賞」は、人生を女性解放や世界平和のための活動に捧げた平塚らいてう氏（1906年日本女大学校卒業）の遺志を継承し、男女共同参画社会の実現および女性解放を通じた世界平和に関する研究や活動に対する顕彰と奨励をはかることを目的に平成17年に創設したものです。

本年は顕彰5件、奨励1件の応募があり、厳正な審査の結果、顕彰1件、奨励賞1件が決定しました。受賞された方々を以下にご紹介します。

■ 受賞者

1. 顕彰（1件）松村由利子氏
（日本文藝家協会会員、現代歌人協会会員）
2. 奨励（1件）芝原妙子氏
（同志社大学大学院アメリカ研究科後期課程）

なお、贈賞式は、2010年2月13日（土）14時より、日本女子大学 新泉山館において行います。

<選考委員>

- 蟻川 芳子 [日本女子大学学長]
中畷 邦 [平塚らいてうの記録映画を上映する会会長]
出淵 敬子 [WILPF（婦人国際平和自由連盟）日本支部会長]
羽田 澄子 [映画監督]

（この件に関するお問い合わせ先）

日本女子大学 広報渉外課内 平塚らいてう賞事務局
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
Tel : 03-5981-3163、Fax : 03-5981-3164
E-mail : raiteu@atlas.jwu.ac.jp
HP : <http://www.jwu.ac.jp/st/grp/raiteu/>



第五回「平塚らいてう賞」選考委員発表コメント

第五回受賞者の選考にあたり、私どもは、候補者の業績を広く、世界の女性のさらなる解放、問題の解決、平和問題や地域社会への公正な目配りと着実な行動の継続という観点から論議し、以下の諸業績に対して、「顕彰」、「奨励」、「特別」に値するとの結論に達しました。それぞれのご業績の特色や褒賞に値する観点は下記の通りです。

< 顕 彰 >

受 賞 者： 松村由利子氏（日本文藝家協会会員、現代歌人協会会員）
研究テーマ： 母性保護論争についての新たな視点と究明

受賞理由：

本年度の「平塚らいてう賞」の顕彰部門は松村由利子氏の『与謝野晶子』（中公叢書 2009年2月刊）を主とする業績に対して贈呈することとなった。

近代日本の歴史研究のなかで、とかく軽んじられている女性史なのであるが、与謝野晶子は数少ない必ずとりあげられる人物の一人である。晶子の残した仕事は和歌・詩・小説・歌論・評論（社会批評を含む）・随筆・童話・童謡など多岐にわたる分野に膨大なものがあり、さらに与謝野源氏といわれる源氏物語の現代語訳など古典の紹介も有名である。したがって、与謝野晶子に関する研究も著作の基礎資料の再検討から夫鉄幹の関わりなどを含めて、様々な角度から進められてきているが、未だ課題は多いといえるであろう。

松村氏はこれまでの歌人そして平塚らいてうとの母性保護論争に注目があつまってきた晶子研究に対して、一分野にとらわれず晶子の全体をみようとした。科学への関心、十三人の子を産み育てたその思い、そしてその間にあふれ出た童話や童謡の創作、聖書への関心など、新しい晶子像をつけ加えた。男子優先の近代日本社会の中で、とらわれない女性自身の肯定や自立の活動を晶子の生き方によりそって明らかにしようとした。それは松村氏の記者生活や歌人としての活動を背景に、現代に訴えるものを、晶子に見出したからである。

< 奨 励 >

受 賞 者： 芝原妙子氏（同志社大学大学院アメリカ研究科後期課程）
研究テーマ： トランスナショナル・フェミニズムの観点から考察する戦間期の日米女性の社会活動：
平和運動と女性の権利獲得運動

受賞理由：

本研究は、二つの世界大戦に挟まれたいわゆる「戦間期」の権利獲得運動を「国境内（ナショナル）」のフェミニズムと「トランスナショナル・フェミニズム」に分けて考えれば、女性参政権獲得運動は前者、女性の平和運動は後者に属するという視点に立って考察を進めている。具体的には、婦人国際平和連盟の成り立ちの歴史を詳細に追求し、欧米人の日本人への働きかけによって、どのように日本の女性たちが触発され、「日本独自の平和運動」を創り出していったかを跡づけようとするものである。この時代は日本における女性の高等教育が発達した明治一大正期にあたり、資料も多く、また欧米でも20世紀末から今世紀初めにかけて、再びこの時期の女性平和運動に対する関心の高まりを示す著作が増えている。それらは現代の世界情勢を反映していると思ってよかろう。そうだとすれば、本研究に期待されるものもいっそうふくらむと言える。

以上